



ネオニコ問題にみる農薬の暗闇



学園花の村顧問

津野 幸人

冒頭で私事を述べて恐縮ですが、私は自分で育てた有機栽培の野菜以外はなるべく食べないようになっています。また、一般栽培のお茶は飲みません。長期移行性殺虫剤の残留が怖いからです。皆さん、インターネットで農作物への農薬使用回数を調べてください。目を覆いたくなる数字が並んでいます。近年の農薬散布回数の激増は、農薬に耐性を持った害虫や病原菌が増えたからです。つまり虫や菌も、その遺伝子を変えて懸命に生き残り作戦を展開しているのです。

生産者の側では、農薬散布の手間を省くために、長期間にわたって効果を發揮する農薬を求めめるのは当然の成り行きでありましょう。そこで登場したのが「長期移行性殺虫剤」です。これは、土

学園花の村機関紙第92号

2016年8月3日(水)

編集兼発行人 松井道夫

TEL (0537) 24-0101

FAX 24-0242

〒 436-0079

〒三三三三 1065

や葉に撒くと、作物に吸収されて作物体の隅々まで浸透・移行します。古い話ですが、この農薬の効果を最高に發揮させるための裏技が発明(?)されました。

たとえば、白菜やキャベツの幼苗期に一つまみ長期型の農薬を振りかけておくのです。すると店頭で見かけるような虫の食い跡のない外観のきれいな生産物が出荷できるのです。お茶にも同様の長期浸透型農薬が使われております。勿論、農薬の散布基準と残留基準がありますので、これが守られておれば人体には安全とされています。が、基準が厳守されているだろうかとの不安が払拭されません。また基準そのものが信用できません。従来の殺虫剤の多くは有機リン系でした。これは昆虫の神経系への毒作用が効果の主役ですが、じきにその農薬に耐性を持つ昆虫が発生します。より毒性の強い新農薬の開発という鮎(い)たち)ごっこが続きました。根本的に深刻な問題は、有機リン系の農薬は人間の神経系にも昆虫同様の害作用があるという点です。ところが、ネオニコチノイド系殺虫剤(ネオニ

コ)は、昆虫の神経系を強く犯すが、人間の神経系への影響は軽いという特性がうたい文句です。そこで、先述の「裏技」は不要となり、農家はたっぷりらに作物に散布できようになりました。

殺虫剤はここ20年ほどで有機リン系からネオニコが主役を担うようになったのですが、果たして安全な農薬でしょうか。ネオニコ散布者に心電図異常が見られ、さらに、果物、お茶を連続摂取した患者の尿中によりネオニコの分解物が検出されたとの医学的所見もできました。生物を殺す薬剤である限り、安全な農薬というものは存在しないと思います。

ネオニコ使用は、ヨーロッパでは強い規制を受けております。ここで売れなくなったあおりでアジアに販路が求められて、ここがネオニコ漬けとなってしまうのです。遅ればせながらもわが国でも環境へのリスク評価の動きが出ました。日本の場合、環境への安全性の評価の一つは、藻類を食べるミジンコへの毒性値だそうです。このミジンコがアメリカ産であったために、毒性値が低く出て、ネオニコは安全とのお墨付きが出たのだそうです。(日本農業新聞・H28/6.24, 万象点描) 何ともお粗末な話ではありませんか。安全な食品は、徹底した無農薬農産物です。みんなでやろう有機農業です。虫食い野菜の交換市場も造りたいですね。